世にも不思議だつた物語

「氷壁」の背後にあつたもの

植木知司

「人と人との間には氷の壁がある」「あの方の本当の恋人は山なのです」とか、「日本中の女性が待つていた」……とは映画「氷壁」の宣伝文だが、原作井上靖のこゝ氷壁〃程多くの人々に感銘を与えた小説も少ない事と思う。特にナイロンザイルの事件は山に登る人も又登らない人も等しく興味を持つた事と思われる。

さて昭和30年正月の事、一週間前後の間に前穂高岳北尾根周辺に於いて3件も切れるはづのないナイロン・ザイルの切断に依る転落事故が生じた。即ち岩稜会（三重）、東雲山岳会（東京）、大阪市大山岳部の事故がそれである。東雲と市大は遭難死に至らなかつたが、岩稜会は若山五朗氏が墜落死し、事件はナイロン・ザイルをめぐつて日に日に拡大していつた。問題のザイルは29年12月初め、名古屋の熊沢友三郎氏より買つたもので、東京製鋼KKの抗張力1,030kgの保証付8mmのもので初使用であつた。

事故の場所は、前穂高東壁でリーダー石原国利、若山五郎、沢田栄介氏のパーティーで、登攀中若山氏のスリップにより、確保していた石原氏になんのショックもなくザイルは切断され、若山氏は行方不明となつた（遺体は同年7月31日発見）。傷心の石原氏は救出された後、「ナイロンザイルは鋭い岩角に対し、麻ザイルに比し非常に弱いと云う従来知られなかつた欠陥か、或は事故ザイルが特別欠点を持つていたと思われる」と発表、1月15日付朝日新聞の夕刊は「その様な悪いザイルを販売するとは何事か」と報じ、次いで墜死者の実父若山繁二氏はNHK第1の『私達の声』で1月17日「私の息子は新製品のテスト台になつた」と全国に放送された。これに対しザイルを販売した熊沢氏や、早大の関根氏は「ザイルの結び目がほどけたのではないか」とか「初心者にありがちな失敗ではないか」と「山と溪谷」「化学」に掲載した。

ここに死因に就いて大きく二つの見解に分れた。即ち一つはザイルが切れたのだと石原氏の発表を信じるか、一つはこの石原氏の発表を疑わしいと見る点（これはザイルは同行者によつて切断されたのではないかとの疑いを当然うける）この解決点は、ザイルの切断原因を科学的に究明する事によつてのみ死因は明らかになるのであつて、事故現場に近い状態を再現して、ザイルが切れれば石原氏の言は正しい。どうしても切れなければ、石原氏の発表は虚偽とされる。ザイルの持つ性能試験を通しても又、死因鑑定の面からも実験は必要になつて来た。一方東京製綱と東洋レーヨンは全日本山岳連盟（全岳連）及び〝山と溪谷〃を通じて3月24日ナイロン・ザイルの使用は停止されたい旨発表、次いで、日本山岳会関西支部長、阪大教授篠田軍治博士が原因究明に乗り出し、メーカーである東京製綱が100万円の経費をかけて蒲郡に実験装置を作り、4月29日公開実験が行われた。結果は切れると思われたナイロンザイルは鋭い岩角の場合でも麻ザイルの数倍の強度を持つ事が判明。結論はパーティのザイル使用の誤りであるだろうと云われ、又石原氏は虚疑の発表を行つた事により犯罪容疑者としての苦境に立たされる事が予想されて来た。しかし此の公開実験は、かけられた岩角のエッヂが丸かつたと実験の参観者により知らされ、又名古屋大学工学部で行つた実験に於いては鋭い岩角では弱い結果が出ているので、当の岩稜会は公開実験には大きな欺瞞性があると考え、犯罪容疑者としての嫌疑を受けた会員、石原氏は6月23日実験を行つた篠原教授は判定の事実を曲げたものであり、公開実験の結果は登山者の生命を危険にさらし、社会公共のためにも良くないと名誉毀損で名古屋地検に告訴した。告訴問題は一層岳界、ジャーナリストをさわがせた。「法的処置が行われた事は我が山岳界の不祥事であり、一日も早く良識を持つて、かゝる不祥事を徹回され……、」と新保正樹氏が「岳人」に掲載したり……。岩稜会の上部団体である三重県山岳連盟ではこの告訴は登山界にとつても又社会にとつても、遺憾な事件であるだけに、今後再び起きない様原因が追求され、究明されなければならない。調査に調査を重ねても不明な項目に就いて31年11月11日公開質問書を発表、篠田軍治氏、東京製鋼KK、東洋レーヨンKK、新保正樹氏に宛てた。しかも未解決のまゝ同月末、第1回全日本登山体育大会が、大峯、大台、大杉で開催され、22日全岳連の評議員会が吉野で開かれた所、三重岳連から閉会頃、突然緊急動議が出された。それは、石原氏の篠田氏に対する告訴に関する事件の解決えの要望だつた。現在のまゝでの両者の解決は望み薄で、このまゝ放任すれば法廷斗争と云う登山界にとつても大きな不幸を見る可能性が強く、この対立を円満に解決する役目は全岳連が最適であると考え、登山界社会の明朗化のためにも解決えの努力を議決して欲しいと提案された。私当時、記録をやつていて、胸にぐつとくるものがあつた。全岳連はこの問題を取り上げ、全岳連としては別な意味からも実験データーは必要なために特別委員会を設けて研究を始めた。次いで委員は群大助教授吉田元、滝川決男氏が決定された。年は明け32年5月16日、全岳連の評議員会が熱海で開催され、研究中の報告がなされた。特別委の研究は着々と進められても、両者の話合は平行線をたどるばかり、その間数人の人が労を取つたが、全て水泡にきした。全岳連がこの問題と取組んでから、特に頭をつかつていた尾関広全岳連副会長は、話の筋を只単に、実験にこだわる事なく、要は登山者が安心して使用出来るザイルの出現を心秘かに念じていた。幸いテリレンと云う新製品があるだけにこの話を東京製綱に持ち寄り、ナイロンをしのぐこのテリレンにてザイルを製作する事により全てが解決するだろうと重なる交渉を持つた結果、東京製綱KKも特許を買取り、製作の見通しがつくと共に話は日に日に好転、今年3月でもつて新製品テリレンザイル第1号が完成した。蒲郡での試験データーはナイロンザイルの2倍の強度をもつ品である。先日この第1号にお目にかゝる機会を得たが、これが岩稜会の事故によつて日本の山岳界にお目見得する事になつたかと思うと感無量と云う処だつた。ナイロンザイルの強度をたてにしていた会社も、弱点を認め、実験を行つた教授も遺憾の意を表し、石原氏は、こゝに告訴を取消し、長い年月問題となつたナイロンザイル事件も、ここにめでたく解決を見る事が出来た。先日三重岳連会長並びに、岩稜会会長が上京し、東京製鋼を訪れる処となつた。その際両会長に逢う機会を得たが、考えて見れば全岳連副会長の労によりめでたく終幕した岩稜会の事件はゝ氷壁〃の映画にまで進転した訳なのだ。

執筆に当つては「山と溪谷」「岳人」「氷壁」「岳連議事録」「告訴状」「三重岳連声明書」等を資料とした——（筆者）

子供の岩登り

一宇人一

殆んど休みのたびに裏の山（丘というべきか）をつれて歩いた長女もまもなく3年を迎へる。親の方は金もかゝらず危険もなく健康的な遊びと思つてつれて行くのだが、子供もそれなりに満足しているらしい。

最近は、タンスにへばりつくことを試み出した。上段の小引出しにお菓子をしまつておいた習慣で自らその引出しに手を入れようとするわけである。取つ手に足をかけ片手を伸ばして更に上の取つ手をつかまえる姿は、一寸した岩登りのスタイルである。上手くやるかなと見ていると巧程引出したところでそれ以上は難しい。この子にしてみればスリルであろう。直立の壁にオーバーハングとなつてかぶさつた引出しに手の入る筈はない。不自然の姿勢は長くつづかず落ちて了う。今度は下段の引出しを細くあけ確かな足がゝりを作ることに成功し又手を伸ばし始めた。

今にこの子が「岩登りを始める」などと云いだしたら自分は何んと答えるだろうかなと考えてフツとおかしくなつた。

◇岳連ニュース◇

○横浜山岳協会では3月9日、新潟県土樽にて雪山研究会を開催、秋本、小泉両委員が参加した。

○同協会は市教委と共催で、3月16日裏高尾へ市民ハイキングを行い、役員として植木、橋本両委員が参加した。

○全日本山岳連盟では第2回全日本登山体育大会を3月20～24日の5日間、北海道、十勝岳連峰で開催するが、植木委員が大会役員として参加した。

お知らせ

○市教委では2月20～23日の4日間、山形県蔵王山にて、市民スキーの会を開催、役員として佐野、植木両委員が参加した。

○分析鑑定室竹内氏は去る2月25日、草津スキー場で骨折し、現在六浦町の大場整骨院に入院中。（個人山行）

表紙絵：長谷川靖子（外郭）